

# 週 報

「信じます。

不信仰なわたしを、  
お助けください」。

(マルコによる福音書第9章24節)



〒662-0834

兵庫県西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691

FAX 0798-63-4044

郵便振替 01170-3-4901

ホームページアドレス

<http://www.koudou.jp/>

電子メールアドレス

[koudou@gamma.ocn.ne.jp](mailto:koudou@gamma.ocn.ne.jp)

## 小さな手大きな手

(前週よりのつづき)

妨げているのは、3号機内の高い放射線量です。以下は、「チェルノブイリの遺産」からのいくつかの引用です。

原発は「経済的でしかも合理的」について。「ウラン235を1ポンド(0.45キログラム)核分裂させると、石炭1500トンに相当するエネルギーが発生する」「しかし、それと同時に、かなり放射線の毒性があり、しばしばたいへん揮発性の高い核分裂放射性核種が非常に大量に生産される。その結果、ウランの利用がきわめて危険なものとなる」「核燃料サイクルは、数年間持続しないではないが、しかし、新しい放射性同位元素が形成され、燃料内で蓄積されていくにつれ、原子炉内の危険性は増してゆく」「標準的な1000メガワット原子炉の場合、30億キュリーに近い放射性核種をその使用済み燃料棒に内蔵している」

第一原発2号機は、事故から15年近く、危険な使用済み核燃料を内蔵したまま、取り出せていません。取り出そうと、悪戦苦闘しています。通常原発では、取り出しの設備がそなえられていますが、地震・事故で壊れ、使えなくなっているのです。「…2号機燃料プール内には615本保管されており、東電は2026年度第一四半期の取り出し着手を目指している」「設備は2号機建屋南側に建設した高さ約45メートルの取り出し用構台の最上階となる5階に設置している。建屋最上階と構台をつなぐレールに設備を載せ、稼働させながらプール内の使用済み燃料などを搬出する」「『キャスク』と呼ばれる金属製の容器に水中で入れた後、クレーンで地上に下し、トレーラーで共用プールに運搬する」「燃料取り出しの責任者を務める東電の上西修司マネージャーは『事前準備に数年かかった。安全第一で着実に作業を進めたい』と語った」(以上、1月16日、福島民報)。

メドヴェージェフが「チェルノブイリの遺産」で言及

し、福島の地元の新聞、福島民報が、徐々に少なくなっている(少なくしている?)、核燃料及び、使用済み燃料とは別に、ケイト・ブラウンが言及しているのが「閉鎖された福島第一原子力発電所」のことです。

「目を見張るほど高い放射線のエネルギーを持つ泥状の放射性廃棄物を、特別に設計された(HICと呼ばれる)ポリエチレン製のタンクに貯蔵しています。

これら(?)の貯蔵状況について、東京電力ホールディングズ(株)のホームページによれば、以下のようになっています。

保管料: 5950/6884体(第二セシウム吸着装置装着用ベッセル及び多核種除去設備の保管容器、処理カラム及びモバイル式処理装置使用済みベッセルを含む)。

こうした、言われている滞留水は、ただそこにあるのではなく、「…人がどれだけ管理をしようとしても、放射性同位体は独自の環境を作り出します…」(ケイト・ブラウン「チェルノブイリの遺産」よりの引用、以下同)。

そして、「このため、事故は継続するのです。作業員は閉鎖された発電所に戻り、詰まったパイプを洗浄し、腐食したタンクを修理し、破損したパイプを繋ぎ直します」「…その過程で、パイプが破裂し、液体が噴出し、ガスが発生し、漏れ出した放射性汚染物質が皮膚に付着し、鼻腔内に入り込み、さらに肺や血液細胞、その他の臓器に到着します」

なのに、たとえばそんな現場で働く人たちが「…放射線の不安76.6%『ない』とする作業員アンケートを発表しています。

(次週につづく)